

第21回20周年記念学術大会報告

1. 概要

環境問題の原点とも言える四日市にある公益財団法人三重北勢地域地場産業振興センター（じばさん三重）を会場に、2018年9月28日（金）から30日（日）の3日間の予定で、「四日市から考える地球と人の未来」を全体テーマに日本環境共生学会20周年記念第21回学術大会が開催された。

初日28日（金）午後には、学会員を対象に、四日市港をめぐる船上クルーズにより海からコンビナートを観て、大気汚染・水質汚染公害の激しかった頃を振り返り、日没後には四日市港ポートビルの展望室から、公害裁判を経て劇的に大気・水質環境が改善された今日、新たな名物にもなったコンビナート夜景を体験した。

29日（土）午前には、環境関係の主要研究プロジェクト紹介セッションがあり、午後には、「四日市から考える地球と人の未来」の全体テーマの下に、記念講演および、2つのパネルディスカッション「四日市：公害克服からコンビナート夜景観光まで」と「環境共生の歩み：公害、ローマクラブ成長の限界、地球環境から、SDGsまで」を開催した。本年度より本学会では将来の日本を担う若い人にも世界や日本で取り上げられている環境問題や取り組みについて一緒に考えてもらう機会を設けており、午前のプログラムには四日市市内の各中学校から生徒の皆さんにも参加して頂いた。

30日（日）には、学会員対象の学術発表セッションが組まれていたが、台風21号が直撃するとの予報があり、また、30日には交通機関が停止するとの告知もあったため、29日夕刻に参加していた理事による協議で、学会員の安全を優先し3日目は中止としホームページでの案内を行った。しかし、案内を確認できず30日に会員が来場する可能性もあったため、30日には理事4名が会場に待機し、結局6名の発表に対応し、午前中に全員解散した。

2. 四日市港クルーズ／夜景展望

初日9月28日（金）午後、近鉄四日市駅および近鉄富田駅に集合し、福利厚生協会バスを利用して四日市港霞ヶ浦埠頭棧橋に移動し、四日市港のクルーズとポートビル展望室からの夜景眺望を行った。

四日市港クルーズは、16時10分から日没直前の17時40分までの1時間30分、「ゆりかもめ」に乗船し四日市港湾事務所の職員の方のガイドで、霞ヶ浦北埠頭を經由し霞ヶ浦地区、四日市地区、第3埠頭、第2埠頭、第1埠頭、塩浜地区、石原地区を海上より見学した。

霞ヶ浦埠頭棧橋に戻った後、ポートビル展望室に移動し、四日市港管理組合の職員の方から、四日市港の概要、役割などについての講演、続いて、四日市港湾事務所より四日市港臨港道路（霞4号幹線）の建設に関する講演が行われた。この建設事業に関しては、本年度の環境活動賞の対象であり、29日の表彰式で受賞された。

その後、18時45分まで展望室より公害を乗り越え、観光の目玉にするなっているコンビナートの夜景を360度眺望し、管理組合および港湾事務所の方々に質問をしたり意見交換を行った。このクルーズおよび展望には、特別講演、シンポジウムへの招待者および学会で35名の参加があった。

3. 主要研究プロジェクト紹介セッション

29日（土）午前、20周年記念大会の企画として主要研究プロジェクト紹介セッションを行った。ポスター（一部スライド）をプロジェクターで映し出し、本学会員あるいは関係する研究者による日本を代表

する以下のプロジェクトが紹介された。

川口和英氏、岡田啓氏（東京都市大学）による「文部科学省研究ブランディング事業：魅力ある未来都市創 生に貢献するエイジングシティ研究および実用化の国際フロンティア」、福井弘道氏（中部大学）による「文部科学省：問題複合体を対象とするデジタルアース共同利用・共同研究拠点」、加藤博和氏（名古屋大学）による「環境省環境研究総合推進費：再生可能都市への転換戦略」、柴原尚希氏、林 良嗣氏（中部大学）による「JICA-JST SATREPS 低炭素領域：Thailand4.0 のためのスマート交通戦略」、沖大幹氏（東京大学）による「JICA-JST SATREPS 環境領域：タイの国家気候変動適応戦略」、および、福田敦氏（日本大学）による「JICA-JST SATREPS 低炭素領域：マルチモーダル地域交通状況のセンシング、ネットワークングとビッグデータ解析に基づくエネルギー低炭 素社会実現を目指した新興国におけるスマートシティの構築」である。

このセッションでは、四日市市内の中学生の参加を市教育委員会にお願いし、30 名ほどの中学生に加え、教諭、保護者の皆さんにも参加頂いた。

9 時 30 分から 10 時 30 分の発表に続き、11 時までは各々興味のあるポスターの前で質疑が行われ、中学生と研究者のやり取りが見られた。終了後に提出してもらったアンケートには、具体的にどの研究のどんなところがどうだ、という記載が多くみられ興味を持って傾聴していたことが伺えたが、感想文には以下のような事柄が述べられている。

「環境についての様々な考え方、意見をきくことができたことがよかった。今まで考えたこともなかったようなこともあり、とても興味深かった。環境について改めて考える機会になりました。外国と連携して問題を解決することも大事だと知った。日本というせまい範囲ではなく、世界という大きな視点で考えることの大切さがわかった。今まで、考えたことのないことを学べて自分の思考が刺激された。」と影響を受け、「地球温暖化は他人事ではなく、自分がそういう努力をしなければならなかった。災害などに対して、自国のことだけではなく他国のことも考えていく事がグローバル化の今、大切なことだと感じた。日本の環境や防災をはじめ、海外にも目を向けられたらいい。自分たちのできることをしっかりとやっけていき日本・世界の環境問題を減らしていきたい。」という自分の立場・行動への気づきに繋がったようであり、「今まで以上にこのような研究に興味を湧いてきた。」と深い関心を示した生徒もいた。

4. 開会式・名誉会員記授与式・学会賞授賞式

開会式は、林良嗣会長の挨拶、三重県知事の代理として、井戸畑真之三重県環境生活部部長による来賓挨拶から始まり、名誉会員記授与式、学会賞授賞式と続いた。

既に名誉会員であった、伊藤達雄氏、大西典生氏、黒川弘と、本年度より名誉会員となられた小嶋勝衛氏、建部好治氏、松岡勝博氏、三橋博巳氏に名誉会員記が授与され、これまでの当学会への貢献が紹介された。

続く学会賞授与式では、学術的な貢献として、論文賞は「台風期の河川流量への気候変動の影響：高知市街を流れる鏡川を例に」で竹内 悠一郎氏、古沢浩氏、吉村耕平氏、那須清吾氏が受賞、著述賞は「おだやかで恵み豊かな地球のために―地球人間圏科学入門」で鈴木康弘氏、寶馨氏が受賞、奨励賞は、「道路整備事業への代償ミチゲーション制度の導入の可能性（学位論文）」で伊東英幸氏、「気候変動の適応策としてのダムの治水・利水容量の再配分に関する考察：紀の川流域を例として（学位論文）」で吉村耕平氏がそれぞれ受賞された。また、本学会または環境共生学の進歩、発展に著しい貢献をなした個人または学校、企業、団体等を表彰する学会賞である環境活動賞は、「津波対策の静岡方式」で静岡県知事

川勝平太氏、「四日市港臨港道路霞4号幹線プロジェクト」で国土交通省中部地方整備局四日市港湾事務所所長佐藤誠氏，四日市港管理組合管理者三重県知事鈴木英敬氏（経営企画部長信田信行氏出席），「都市環境ゼミナール運営による環境啓発活動」で都市環境ゼミナール代表伊藤達雄氏がそれぞれ受賞された。

5. 記念講演・パネルディスカッション

記念講演は、「地球環境と企業，市民，政府，NPO～GAIAから見る～」をテーマに，NPO法人ガリア・イニシアティブ代表，ローマクラブフルメンバーの野中ともよ氏にお話しいただいた。野中ともよ氏は，NHK，テレビ東京等で数々の番組メインキャスターを務め，国際社会の動向を前線から伝えるジャーナリストとして活躍し，その後，アサヒビール，ニッポン放送，住友商事などの企業役員を歴任された。2005年には三洋電機株式会社代表取締役会長を務め，“いのち”を軸にした環境負荷の低い商品こそがグローバルマーケットを制する鍵であるとし，卓越した経営手腕を示された。2007年NPO法人を立ち上げ，人間も地球という生命体GAIAの一員として振る舞うべきことを説いている。記念講演では，GAIA=命を軸に生きる思想について語っていただいた。

続くパネルディスカッション1「四日市：公害克服からコンビナート夜景観光まで」では，コーディネータに朴恵淑氏（三重大学教授），パネリストとして，種橋潤治氏（三重銀行会長），馬路人美氏（海洋少年団OG），鶴巻良輔氏（元昭和四日市石油（株）工務部長），岡田昌彰氏（近畿大学教授），森智広氏（四日市市長）にご登壇いただいた。白砂青松の四日市の海は，1960年代以降，次々と石油化学コンビナートが建設され，海岸線は工場が建ち並んだ結果，激しい大気汚染に見舞われ喘息患者が多く出，四日市周辺の海の水質の大幅な悪化が進み，72年の裁判の後，企業が活動する土俵のルールを変更することにより，企業行動が180度転換され，今日では，コンビナートの夜景が観光資源となるまでに変わった。このような四日市の環境の歴史とその意義は何だったのかを語り合っていた。

単なる公害の振り返りではなく，市民，企業，行政，NPO，亜硫酸ガスと健康被害の因果関係を立証していった専門家，被告らが一緒になって克服してきた四日市自の歴史，そして経験の共有とテクノスケープが，公害のマイナスの価値から出発してプラスの遺産にまでつくり上げていく道筋を示した。

パネルディスカッション2「環境共生の歩み：公害，ローマクラブ成長の限界，地球環境から，SDGsまで」では，コーディネータに林良嗣氏（中部大学教授，9月まで会長），パネリストとして，那須民江氏（中部大学教授），沖大幹氏（東京大学教授），溝口勝氏（東京大学教授），遠藤和重氏（国際連合地域開発センター所長）のご登壇いただいた。60年代のレーチェル・カーソンの合成化学物質による生態系破壊への警告，四日市の大気汚染など公害の時代から，72年のローマクラブによる「成長の限界」，80年代の国連ブルントラント委員会によるSustainable Developmentの思想へと，局地汚染から地球規模問題へと認識が広がり，90年代の気候変動と生物多様性の国連締約国会議のスタート，2011年の福島原子力発電所事故による放射能汚染被害，そして，国連でのSDGs発効によるSustainabilityへの包括的なアプローチへと，新たな問題と枠組みが加わった環境問題について，人体から地域環境，地球環境までが語られ，バランスの重要性が浮き彫りにされた。

大会実行名誉委員長 伊藤達雄

大会実行委員長 林良嗣

大会実行副委員長 石橋健一，森下英治

大会実行委員 林希一郎，加藤博和，伊藤雅一，原理史，城月雅大，杉浦晶子